

◆かっぱ民話シリーズ⑪◆

太郎河童と小童

たろうかっぱ と こわっぱ



作:近藤せいけん



相模の国の河童村、「三流」の村長 太郎河童は毎日村を見回るのを日課としていた。三流の一つ、中津川を見回った時の事であった。一人のこわっばが魚釣りをしていた。その日は上流でかなりの雨が降り、水かさもじょじょに増し始め、流れも急に早くなりはじめていた。「今日はあまり釣れないなあ、雨も降ってきたことだし、そろそろ帰ろうかなあ〜」その時である。急にあたりがあり、竿が弓なりになった。強い引きがあり腰を落として、足をふんばった。しかし足がすべり、身体ごと川に「ドボン」と落ちてしまった。流された。「あっ！ 危ない！ 助けないと！」太郎河童は急いで、流れの速い川の本流に潜って「こわっば」に近づいた。こわっばは水中でもがいていた。太郎河童は身体を抱き水中から引きあげた。他のこわっばも手伝い、河童村「三流」の岸に引き上げた。こわっばの意識はなかった。「さあ〜水をはかせよう！」皆、手伝ってくれ。「心の臓が止まっている！ 河童族の秘伝（ひでん）の特効薬を使おう！」こわっば村の名医の赤ひげがこわっばの口を開け、特効薬を流しこんだ。「これでいい〜もうすぐ意識をとり戻すじゃろう」こわっばを太郎河童の家に運ぶ。しばらくするとこわっばが意識をとり戻し、目を開いた。

「ここはどこじゃ～」

「何故、おれはここにいるのじゃ」

「おぬし達はだれじゃ？」

「見慣れない顔じゃが？」

村長の太郎河童が語りかける。

「おぬしはこの上の中津川で釣りをしている、足を滑らせ川に落ち、意識をうしなった」

「覚えていないか・・・」

「そう、いわれれば、確かに釣りをしていた・・・」

こわっばは少しづつ思い出してきた。

「そうだ！すべって川に落ちた。あとは、覚えていない・・・」

こわっばはもう、特効薬の効能出、起き上がることができた。

「どこか痛いところはないか？」

「うん、うん～どこもない・・・」

「ところで、わっば～おぬしの名は何という？」

「どこの村の者じゃ？」

「いくつ、じゃ？」

こわっばが答えた。

「おれの名はうし松、三田村の者じゃ。歳は九才じゃ」

「とと、かかはいるのか？」

「ととはおれが三才のときはやり病でなくなった」

「かかはいま、心の臓が悪く働けない」

「おれと兄貴、妹が働いて、めしをくっている」

太郎河童が尋ねた。

「おまえの仕事は何だ？」

「おれは朝早く起き、まず川釣りで魚を釣り、町にもって行って売る、そのあとしじみを売って歩く」

「兄貴は八百屋の手伝い、野良の手伝い、重い荷物運び、いろんな仕事をしている」

「兄貴はいくつじゃ？」

「十八じゃ」

「妹はいくつじゃ？」

「六才と四才じゃ」

「そうか・・・苦労じゃなあ・・・」

「魚釣りをしていて、川におちたのじゃなあ・・・」

「まだ、幼いのになあ・・・」

うし松はもとの元気を取り戻した。

「うし松、元気を取り戻したようじゃなあ～よかった」

太郎河童が大きい白い透きとった球をとりだした。

「これは、どこでも見とせ球じゃ」

「おまえの家を見てみよう」

「あれ、幼い妹が泣いている、腹をすかしているようじゃ」

「かかが、あやしているが幼い妹は、泣き止まないようじゃ」

「ああ～食べるものがないようじゃなあ・・・」

うし松はじっと透し球をみつめていた。

「ここは、河童村、「三流」わしが村長の太郎かっぱじゃ」

「わしがおまえを助けた、これも何かの縁じゃろう」

「うし松、おまえは正直者で、働き者、親、兄弟おもい、兄弟そろって善人じゃ」

「おまえ達、兄弟にかっぱ村「三流」の特別通行証を与えよう」

「かっぱ村には自由に入りことができる」

「かっぱ村で出来た、野菜、漬物、海の魚類、川の魚類、物産の販売を許そう」

「但し、一つだけ、条件がある、われわれ河童族には作りだすことが出来ない、甘味の原料「砂糖」を交換で運んで欲しい」

「どうじゃ、うし松、やるか？」

「ほんとうに、かっぱ村の品じなをあつかえるのか？」

「そうだ、おまえ達兄弟にまかせる」

うし松は少し考えて、大きな声で答えた。

「やります！やらしてください！こんないい話はない！」

「兄貴もぜひと、いうとおもいます」

「そうか、よかった」

「それでは、かっぱ村「三流」の入村の証、真珠の腕輪をさずける」

「そして、おみやげに米、もち、野菜 漬物、魚、たくさんもっていけ」

「ありがとうでござる、夢を見ているようじゃ！」

この日境に、人間界と河童村「三流」との交易がはじまった。

(終わり)